

F. Scott Fitzgerald の小説にみる時間と人生

山中 祐子

(受付 2010年9月27日)

はじめに

F. Scott Fitzgerald の作品の特徴は、読者の関心を最後まで惹きつけて離さないストーリー展開であり、それを支える構想力である。その構想力の核となる着眼点の一つに、人生を支配する時間の側面を操作することにより、人間の愛や欲望が生み出す悲しさや矛盾を顕在化させる点を挙げることができる。

過去の文学において、時間と人生の関係をテーマにして創作されたものは多くあるが、ここでは文学における時間論の中で、特にフィッツジェラルドの用いた手法に主眼をおいた。

人生は時間に支配された物語であり、我々の人生観や幸福観は意識されない時間の制約の上に組み立てられている。フィッツジェラルドは人生に対する時間という要素を巧みに小説の構想に織り込んでいる。以下に、フィッツジェラルドがその作品の中にどのような時間要素を組み入れ、どういう小説表現効果に成功しているかを検証してみたい。

フィッツジェラルドの作品における時間概念は大別して下記の二つに整理される。

一つは、男女の恋愛感覚における時間概念である。ここではこの恋愛感覚の時間的変化を人間の脳内で司るものを恋愛時間と定義する。もう一つは、人間の個体における生誕から死までの成長と衰退を生物学的に司るもので、これを生命時間と定義し、以下に両時間に関するフィッツジェラルドの小説構想の論証を進めていく。

本論文では、個々人の恋愛時間の違いが生み出す悲劇を書いた小説として、恋愛時間がある日突然崩壊するドラマを描いた *Winter Dreams* (1922)、恋愛時間がある日の時点で膠着してしまったために発生するドラマを描いた *The Great Gatsby* (1925) の二点をまず取り上げる。次に生命時間そのものが反転するという奇想天外な着想でのドラマを描いた *The Curious Case of Benjamin Button* (1922) を取り上げる。

フィッツジェラルドの小説のうち *The Great Gatsby* や *Winter Dreams* についてはさまざまな観点から多くの論文が発表されている。しかし *The Curious Case of Benjamin Button* については数少なく、最近では村尾純子氏の「“The Curious Case of Benjamin Button” における楽園願望」が見られる程度である。また、*Benjamin Button* は最近、映画 *The Curious Case of Benjamin Button* (2008) (邦題『ベンジャミン・バトン 数奇な人生』) も公開されているこ

とから、ここでは映画の脚本との対比も組み入れて述べていく。

本論文では以下に論じる恋愛時間と生命時間について、その定義をさらに明確にしておいた上で本論に入る。

I. 恋愛時間と生命時間の定義

I-1. 恋愛時間について

人間は強い感情を有する動物であり、時に感情が暴発する事もある生き物である。その感情の源泉は大別して二つある。一つはフロイトが言うエロスであり、個人的、利己的な感情である。もう一つは自分が存在する世界、すなわち家族、民族あるいは国家などへの帰属感情である。これらの感情は大きく傷つけられたり、抑圧されてトラウマとなると、生涯個人の感情世界を支配する魔力を持ったりするものである。

フィッツジェラルドの小説では、主にエロスによって沸き起こる強い感情、いわゆる恋愛感情によってドラマが大きく変化する構想が多い。本論ではこの恋に落ちた男女が感じる恋愛の中での時間感覚を司るものを、その人固有の恋愛時間と定義する。

フィッツジェラルドが描く小説では、恋愛時間が大きく変化する。この変化とは恋愛感情が過去に遡ったり、長時間停止したり、過去を消去したりするのである。これらの変化は何かを引き金にして始まる。また恋愛時間のスイッチが入る誘因の共通要素は、*Winter Dreams* のデクスター、*The Great Gatsby* のギャツビー、*The Curious Case of Benjamin Button* のベンジャミンの全てにおいて、相手の女性の美貌と全身から溢れる小悪魔的な魅力に起因している。この誘因は男性からの視点で書かれたものであるが、女性からの視点では逆になると想定される。

I-2. 生命時間について

一般に時間とは計測可能な物理的な時間を言う。生命体の成長と変化はこの物理的な時間要素に大きく支配されてはいるが、生命体の遺伝子の中にプログラム化された要素にも左右される。たとえば、熊や虫など冬眠するような動物は冬の間は基礎体温を下げるなどして、生命活動を最低限にして春が来るのを待つ。これは、物理的な時間とは別に生命体が固有の時間を制御する機能を持っていることを意味しており、ここではこの機能を司るものを生命体固有の生命時間と定義する。

人間においても組み込まれた遺伝子によって、ある人は早く成長して早く老ける。逆に成長が遅く若振りの人もいる。従って人間においても個々人が異なる生命時間を持っているといえる。

人間の生命時間に組み込まれた遺伝子には、人類の織り成してきた歴史の教訓が組み込まれており、自分の属する家族や民族、更には国家の社会的・経済的成功を目標として機能するようになっている。そのため、人間は生まれて成長していく中で、親は勿論本人も幼くして将来何になりたいか、どんな仕事をしたいか、どんな業績を残したいかの夢を育み、いかにして社会的・経済的成功、栄誉と富を得るかを目標に成長していく。この成長過程は全てにおいて時間的要素を根底に置いており、人類共通の生命時間の基盤と言える。

フィッツジェラルドの描く主人公の人物像は、社会的成功と経済的成功を目標に生き、結果として成功者となる人物像を描いているものが多い。*Winter Dreams* の主人公デクスターも、*The Great Gatsby* の主人公ギャツビーも、*The Curious Case of Benjamin Button* の主人公ベンジャミンも社会的・経済的には成功者である。すなわち強力な生命時間のもとに生まれ育った人達である。

I-3. 二つの時間と人生

人は赤ん坊で生まれ、年月を経て学び成長し、そして思春期に異性への思慕に苦悩しながら恋愛し、人を愛するということを学び、結婚し、子育てをし、老いていくのが一般的である。基本的に人間の幸不幸や成功物語は時間の経過の中で生まれ成長進化していくものである。そのため人間の幸福観は認識の有無に関わらず時間の概念の中で形成されていく。

前述した二つの時間のうち、生命時間は、人生全体を通してのスパンで社会的・経済的成功を幸福観の基礎と捉える一方、恋愛時間では理想とする異性との衝撃的な出会い、恋い焦がれる情熱の高まり、そしてその感情をベースに身も心もとける恍惚の世界を味わうことを幸福観として捉えている。

前者は成功の人生シナリオを完成させることに幸福観を、後者は燃える情愛の一瞬の恍惚を幸福観に据えている。人生はこの二つの幸福観が満たされた時、成功と幸福を手に入れたといえる。

一般的に学校を卒業後、社会などで活躍し、いつしか中年になり、同窓会などで友人と再会したとき、友人の容貌が一変して、記憶に残るまばゆい若さの輝きが失せたことに驚きを覚え、そこまでに費やされた時間の長さを痛感することがある。特に恋愛感情で思慕し続けてきた相手のへの感情は、相手の容貌の一変と、胸に描き続けていたイメージとのギャップに大きなショックを感じ、それまで抱いていた恋心が消え去っていくことがある。

なぜそうなるのか、それは生物学でいう遺伝子によって予め設計された時間を刻む生命時間の推移と、心理的な時間、特に恋愛感情に裏打ちされた恋愛時間が異なる時を刻み、両者に大きなギャップを生じてしまうからである。また、心理的な支配下にある恋愛時間は実時間とは無関係に停止したり進んだり崩壊したりするからである。フィッツジェラルドはこの点

を小説構想の核に据え、人生の機微を描き出すことに成功している。

以下にフィッツジェラルドが小説の中で、前述した定義に基づく恋愛時間と生命時間の二つの時間をどのように表現しているかを考察する。

II. フィッツジェラルドの恋愛時間小説

II-1. 強烈な恋愛時間も突然停止・崩壊する

冬の夢, *Dexter* の時間

短編 *Winter Dreams* は、主人公のデクスターが少年時代にゴルフ場のキャディをしているとき出会った富豪の娘 Judy との恋物語を描いている。最初は主人公の少年キャディと我侷な客として出会った二人だが、再会したときにはデクスターは有望な青年実業家になっており、ジュディは小悪魔的な美貌と色気を備えた美女に成長している。これを生命時間から見ると、二人の時間は、男性としての社会的成功の道を歩むデクスターと、男性を惹きつけてやまない美貌を手にいれたジュディの、それぞれの未来に幸せを予感させる時を刻んでいる。

“My name is Judy Jones”—— she favored him with an absurd smirk—— rather, what tried to be a smirk, for, twist her mouth as she might, it was not grotesque, it was merely beautiful—— (p. 122)¹⁾

そして成長した二人が再会したとき、二人の恋愛時間のスイッチが入る。二人の恋愛時間が至福のときを刻んだのは次のように描写されている。

There was a pause. Then she smiled and the corners of her mouth drooped and an almost imperceptible sway brought her closer to him, looking up into his eyes. A lump rose in Dexter's throat, and he waited breathless for the experiment, facing the unpredictable compound that would form mysteriously from the elements of their lips. Then he saw—— she communicated her excitement to him, lavishly, deeply, with kisses that were not a promise but a fulfillment. They aroused in him not hunger demanding renewal but surfeit that would demand more surfeit—— kisses that were likely charity, creating want by holding back nothing at all.

It did not take him many hours to decide that he had wanted Judy Jones ever since he

1) F. Scott Fitzgerald, *Babylon Revisited and Other Stories* (New York: Charles Scribner's Sons, 1920)

was a proud, desirous little boy. (pp. 124-125)

恋愛時間はこの恍惚感の獲得を目標にして時間を刻む。そして恍惚の恋愛時間が人間に幸福感をもたらす源泉になる。

しかし、逢瀬を重ねて築いた二人の恋愛も、我侷放題に遊ぶジュディのふるまいにデクスターが愛想をつかし、デクスターはジュディから逃れるために Irene と婚約する。

ところが、デクスターの恋愛時間は一次停止状態になるだけで決して壊れているわけではなく、僅かの刺激があれば再び作動する「待ち」の状態になっていた。そのような状態の中でジュディが再び現れ誘惑する。そうすると、たとえアイリーンとの婚約中でもデクスターの恋愛時間は再始動する。恋愛時間はひとたび作動を始めると人間の感情世界を支配して、知性や打算では抑えきれないものになり、その結果、デクスターはアイリーンとの婚約を破棄してしまう。この破滅的衝動に走るエネルギーが恋愛時間の魔力である。しかしジュディの我侷な性癖が改まるわけもなく、二人の恋愛は再び破綻してしまう。

それでも恋愛時間はまだ再作動可能な「待ち」状態で停止していた。しかし7年の年月を経た後、偶然にデクスターはジュディの消息を知らされる。その消息によってジュディの若き日の小悪魔のような魅力は消え失せ、今は平凡な色褪せた主婦になっていることを知る。この新しい認識がデクスターの心の中の大きな何かを破壊させ、彼は巨大な喪失感に襲われる。

For the first time in years the tears were streaming down his face. But they were for himself now. He did not care about mouth and eyes and moving hands. He wanted to care, and he could not care. For he had gone away and he could never go back any more. The gates were closed, the sun was gone down, and there was no beauty but the gray beauty of steel that withstands all time. Even the grief he could have borne was left behind in the country of illusion, of youth, of the richness of life, where his winter dreams had flourished.

“Long ago,” he said, “long ago, there was something in me, but now that thing is gone. Now that thing is gone, that thing is gone, I cannot cry. I cannot care. That thing will come back no more.” (p. 135)

デクスターは過去の恋人に関してなぜこんなに嘆くのか。この嘆きの本質はジュディの変化を嘆いているのではない。嘆いているのは彼の心の中であって、これまで自分自身の感情世界を支配していた恋愛時間が脆くも崩壊したことを嘆いているのだ。つまり恋愛時間とは

人を支えている無意識の希望のような存在で、普段は何の自覚症状もないが、無くなると自分の支えが無くなってしまおうとを感じるものである。心に刻まれてきた時間が一瞬のうちに吹き飛び消去されてしまうのである。これは心の中の時間感覚の突然の剥落といえる。

なぜそんなことが起こり得るのか。恋愛時間の不思議さは、その何者をも恐れぬ強さで暴走するエネルギーの強さに支えられて、どんなに長い停滞期間をも黙々と耐えて時間を刻み続けることである反面、何かのショックによって、一瞬にして時計が逆転し、それまで刻み続けてきた心の時間を消去させてしまう怖さを持っていることである。

デクスターの失意の叫びは、この長年刻み続けてきた心の中の恋愛時間が崩壊したことの表れである。

II-2. 過去の自分への回帰願望

純粋な自分への回帰を図る *The Great Gatsby* の時間

この小説では、西部の貧しい家庭に生まれた主人公ギャツビーが、成功への野心に駆られて家を飛び出し、都会で名門の娘デイジーと出会い、激しい恋におちる。

His heart beat faster and faster as Daisy's white face came up to his own. He knew that when he kissed this girl, and forever wed his unutterable visions to her perishable breath, his mind would never romp again like the mind of God. So he waited, listening for a moment longer to the tuning-fork that had been struck upon a star. Then he kissed her. At his lips' touch she blossomed for him like a flower and the incarnation was complete. (p. 112)²⁾

このとき純粋だったギャツビーの恋愛時間は生まれてはじめて最高潮の時を刻んでいた。しかしその後、ギャツビーは戦争に狩り出されて二人の恋愛は突然中断する。恋愛感情が燃え盛る最中に中断を余儀なくされた恋愛時間は、ギャツビーの胸の中で恋するエネルギーを溜めながら再作動する日を夢見て一時停止した。

その後ギャツビーが戦争から帰還すると、デイジーはすでに富豪の妻になっている。この現実には、あの夜の愛を信じ続けてきたギャツビーには信じられないことであつたに違いない。戦争の最中でさえ、彼の心の中ではデイジーへの恋心が激しく燃え続け、抑え付けられていたからだ。無理やり進むことを止められた恋愛時間は戦争から帰る直前に知った人妻デイジーの現実を受け入れられない。

2) F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby* (New York: Charles Scribner's Sons, 1925)

しかし、彼にはデイジーを手に入れるために必要な富というものが無かった。そんな彼は富を手に入れるために手段を選ばない世界に足を踏み入れてしまう。当時は禁酒法の時代で、密造酒はギャングの資金源と言われた時代である。そんな時代にデイジーとの忘れられない純愛の世界を取戻すために、密造酒を製造販売していると陰で噂される危険を冒してまで膨大な富を手に入れたのである。

He talked a lot about the past, and I gathered that he wanted to recover something, some idea of himself perhaps, that had gone into loving Daisy. His life had been confused and disordered since then, but if he could once return to a certain starting place and go over it all slowly, he could find out what that thing was... (pp. 111-112)

そんな彼に一時停止していた恋愛時計のスイッチが入る時が再来する。富を手に入れたギャツビーの成功の館にデイジーを招き入れる日が来たからだ。

He had passed visibly through two states and was entering upon a third. After his embarrassment and his unreasoning joy he was consumed with wonder at her presence. He had been full of the idea so long, dreamed it right through to the end, waited with his teeth set, so to speak, at an inconceivable pitch of intensity. Now, in the reaction, he was running down like an over-wound clock. (p. 93)

このとき、これまで停止していたギャツビーの恋愛時間は再作動を開始した。戦争で長らく凍結状態にあった恋愛時間が、それまでの停滞を取り戻すように激しく作動を始めた。ギャツビーの恋愛時間は、動き出したら抑えようがなくなり暴走してしまう。

“Your wife doesn’t love you.” said Gatsby. “She’s never loved you. She loves me.” “You must be crazy!” exclaimed Tom automatically. Gatsby sprang to his feet, vivid with excitement.

“She never loved you, do you hear?” he cried. “She only married you because I was poor and she was tired of waiting for me. It was a terrible mistake, but in her heart she never loved anyone except me!” (p. 131)

デイジーの恋愛時間は5年前にギャツビーと抱擁した夜の時間から大きく進んで、いまでは彼女は人妻であり子供の母親になっていたのだから、ギャツビーと出会っても恋愛時間は過去に

は戻らない。しかし、ギャツビーの恋愛時間はあの抱擁した夜の時刻で止まっているため、ギャツビーにとってデイジーは変わることなく自分を愛し続けているとしか考えられない。二人の恋愛時間は刻む時が大きく異なってしまっていたのだ。

恋愛感情は、過去の記憶の上に幻想を積み上げる自己増殖的な心理作用である。この恋愛感情を基盤とする恋愛時間は、社会の規範や法律さえ無視して動いてしまう。この観点からみると、ギャツビーの恋愛時間がデイジーの現実を無視して動いてしまうのも納得できる。だが、デイジーの恋愛時間は結婚、出産と女性の時間を刻々と刻み、ギャツビーの恋愛時間とは大きなずれが生じてしまうのである。

恋愛時間は、二人の時間が同期したときには激しく燃え盛るが、刻む時がずれてしまうと、一気に愛の破綻に向かってしまう。

この異常とも思えるギャツビーの恋愛時間の再作動について、H. マイヤー・ホフは『現代文学と時間』の中で、次のような解釈を示している。

……現代文学の中では『偉大なギャツビー』が同じような状況を提示している。ギャツビーは自分の過去を取戻すことによって自分自身を取戻し、そして「真の自我」を発見しようとする（結局それは徒労に終わるのだが）。彼の場合、生の連続は、彼が愛する女性デイジーを失った時、決定的に断たれてしまう。つまりこの時点を境にして、ジェイムズ・ギャツビーはジェイ・ギャツビーへと変身するのである。それ以来彼が生きてきた偽りで、墮落した、欺瞞的な生はすべてこの「ひどい裂け目」のせいにされる。同様に、失ったもの、すなわちデイジーの愛を取り戻すことによってはじめて、彼は自分の生の連続性を回復し、彼のばらばらになった自我も修復されて、真の「彼自身についてのプラトニックな考え方」が復活するように思われるのである。（pp. 68-69）³⁾
彼の初めの自我（ジェイムズ・ギャツ）と後の自我（ジェイ・ギャツビー）との間の亀裂は修復するにはあまりに深すぎる。純粹で絶対的な愛があるという「不滅の夢」も幻想にすぎない。（p. 70）

つまりマイヤー・ホフは、ギャツビーは、戦争と、帰還してからのギャング生活で、墮落し欺瞞的な自我（ジェイ・ギャツビー）の持ち主となったが、心の中では過去の純真な自我（ジェイムズ・ギャツ）のままであり続けたいと望んでおり、そのためにはデイジーとの愛を取戻すことが不可欠だと信じて、途方も無い行動に走ったのだと解釈している。マイヤー・ホフはギャツビーの物語は単純に純粹な愛を求める物語ではなく、ギャツビー自身が失った

3) H. マイヤー・ホフ著、志賀謙、行吉邦輔訳、『現代文学と時間』研究者叢書 1974

過去の自我への回帰を求める自我同一性を回復する物語と捉えているのである。

フィッツジェラルドの短編小説には、女性の恋愛時間が一定期間停止するものもある。*Love in the Night* (1925) がそれである。この小説は、ロシアのロマノフ王朝末期の時代背景を舞台に繰り広げられる愛のドラマで、ロシア帝国のロストフ公の17歳のプリンスが、ある夜の船上パーティに出る予定で出航したが、船を間違え、隣の船に乗っている17歳の少女と一夜の恋に落ちるところからドラマが始まる。

この少女も17歳だが、60歳位の男性と結婚したものの、少女は自分の結婚を「失敗」と感じ、嘆きの中で他の男性との出会いを求め、同じ年の主人公と偶然に出会い、瞬時に恋に落ち、その場で結ばれていく。

しかしその後、ロシア革命により彼はプリンスの座を奪われ、両親は自殺し、生活の為にタクシー運転手になりその日暮らしのみじめな生活を強いられることになる。彼にとってはプリンスとしてのあの一夜の夢は、今はもう望むこともできない過去の思い出にすぎない。

17歳のとき、彼は自分の人生にはロマンスが満ち溢れていると信じていたが、8年経つと、それが叶わないのを察するようになり、始まりだと思っていたロマンチックな夢が終わりとなってしまった少年時代の思い出に浸る時間が長くなっていく。彼は神聖な思い出を忘れられず、出会いであった4月になると海岸へ歩いて行き、港に停泊しているヨットの船首に記されている名前を読んでいくのが習慣になっていた。彼はそこで偶然にも4月の同じ頃に、彼女の夫が亡くなり、彼女もこの港にヨットを留めていることを知る。

All night Val didn't sleep——not because there was any question in his mind as to what he should do, but because his long stupefied emotions were suddenly awake and alive.
(p. 82)⁴⁾

彼の止まっていた恋愛時間は突然目覚めて、彼女が自分を忘れていないことを確信し、アメリカ領事館へとかけつけ、そこで奇跡的な再会を果たす。彼女もまた、夫が亡くなって後の3年間は、彼に会うために毎年4月に初めて出会った場所にヨットを停泊させ彼に再会できるのを待ち続けていたのである。

彼の中での恋愛時間は革命という時間の流れの中で時を刻み、いつしか一夜の思い出として風化していったのだが、彼女の恋愛時間は、あの夜のままで停止し、夫の死後彼との再会を待ち続け、毎年彼に会いに来ていた。彼女は結婚生活を失敗と感じていたため、彼との恋愛時間は一時停止状態のままであった。ギャツビーのケースとは違い、こちらは彼の恋愛時

4) F. Scott Fitzgerald, *21 Uncollected Stories by F. Scott and Zelda Fitzgerald/ selected by Matthew J. Bruccoli, with the assistance of Scottie Fitzgerald Smith* (Scribner's, 1973)

間が彼女の恋愛時間の時刻まで遡っていくことにより二人は奇跡のハッピーエンドとなる。

このことは二人の恋愛時間が一度食い違いを生じて、男女いずれかの時計の時刻が相手に合わせて調整されれば、二人の恋愛は再び復活することを示している。

この物語を別の視点からみると、二人の恋愛時間は、過去の幸せな愛の世界の復活を強く望むエネルギーによって、物理的な時間を越えて再び同期したことにより、二人は失われた時を取り戻すことが出来たのである。

以上に述べたように、フィッツジェラルドの描く恋愛時間は、世間のルールや決まりを突き破って進む爆発力を内在している反面、ふとしたことで、停止したり破滅したり、あるいは突然復活したり、と不可解な歩み方をする不思議な可能性を秘めている。

Ⅲ. フィッツジェラルドの生命時間小説 ベンジャミン・バトンの時間

ここまでは恋愛時間について述べてきたが、今度はベンジャミン・バトンを通して生命時間が一般的な人生の時間の流れと一致しないケースを考える。この小説は生命時間が逆に回るという常識ではありえない設定であるため、小説として成立させるためにフィッツジェラルドは多くの工夫を施している。

Ⅲ-1. 生命時間が逆転する中での、家族との関係性

(1) 生誕と親子関係

通常、人間は何の知識もない赤ん坊として生まれ、親はその子の未来に自分自身の夢を託して育て、それが親子の信頼感と情愛を育むものである。

初めから大人として生まれるベンジャミン親子にはそういう親子の信頼と情愛を築く過程が存在しない。この困難な問題の解決をフィッツジェラルドは小説の中で以下のとおり構成している。

Wrapped in a voluminous white blanket and partly crammed into one the cribs, there sat an old man apparently about seventy years of age. His sparse hair was almost white, and from his chin dripped a long smoke——colored beard, which waved absurdly back and forth, fanned by the breeze coming in at the window. (p. 6)⁵⁾

5) F. Scott Fitzgerald, *The Curious Case of Benjamin Button* (Scribner, 2007)

Mr. Button が, “to determine whether the darkness of the night had borne in new life upon its bosom.” (p. 2) と, 心に決めたことを皮肉るように, 一日の始まりが朝からでなく the darkness of the night から始まったのだ。つまりこれは通常の人生における朝から夜への物語ではなく, 夜から朝への物語である。

ベンジャミンは生まれた直後迎えに来た父親に向かって話しかけている。

The old man looked placidly from one to the other for a moment, and then suddenly spoke in a cracked and ancient voice. “Are you my father?” he demanded. ... “Because if you are,” went on the old man querulously, “I wish you’d get me out of this place——or, at least, get them to put a comfortable rocker in here!” (pp. 6-7.)

病院のベッドで服を着替えるとき, 生まれたばかりのベンジャミンは父親が買ってきた服を見て父親に “They look sort of funny to me,” he complained. “I don’t want to be made a monkey of——” (p. 13) と話しかけている。

すなわちベンジャミンは父親と衣服について会話し, その衣服が異様であるか否かについて話し合える知識と言語力を有しているのである。

父親はどうしても息子ベンジャミンを普通の人間と考えたいので, 世間一般の生命時間にベンジャミンを合わせようとする。生まれて6時間後, 父はベンジャミンを自宅へ連れて帰るのに fancy dress (p. 12) を選ぶ。ベンジャミンは不服ではあるが, 父親に尊敬をこめて, “You’ve lived longer; you know best. Just as you say.” (p. 13) と父に従う。息子は父に拒絶されながらも父に従おうと努力していく。

At first he declared that if Benjamin didn’t like warm milk he could go without food altogether, but he was finally prevailed upon to allow his son bread and butter, and even oatmeal by way of a compromise. (p. 15)

換言すると, ここでの親子関係の構築は自然発生的なものでなく, 社会での大人同士が関係づけをする手法と同様に, 会話により相手を理解し受け入れるという方法での親子関係の構築を図っているのである。こうしてフィッツジェラルドは老人から生まれるという構想の出発点の難題を解決している。

しかし, 父親との関係が順調に構築できるわけではない。たとえば, ベンジャミンは父親に隠れて, 父親の大切にしている葉巻を吸う。ベンジャミンにとっては葉巻を吸うのは当たり前のことだが, 父親にとっては幼児が葉巻を吸うなどということは信じられない事態だ。

ただ、父親はこの頃からベンジャミンに不思議な生命時間の存在を感じ始め、ベンジャミンが葉巻を吸うことを“stunt his growth.” (p. 16) と軽く叱るだけで見過ごす。

とはいえ、父は illusion とは解っていてもやはり perfect illusion にするために、Nevertheless he persisted his attitude. (p. 16) と続いていく。

70歳に見える息子と30歳の父親は努力してもなかなかうまくはいかない。同様に、70歳のベンジャミンの祖父は、the baby resembled his grandfather. (p. 17) と言われることに、最初は侮辱されたと激怒していたのであるが、次第に孫ベンジャミンに抱いていた antagonism (p. 18) は薄れて行き、逆にベンジャミンと祖父はお互いに大きな喜びを分かち合うようになる。祖父と孫はゆったりとした流れの中を語り合うことが出来、気楽に感じる事が出来る。しかし、息子と親とはそうはいかず、親としての権威をふりかざされ、そして時には大人として扱われるのである。

ベンジャミンが5歳(65歳外見)のとき、父親の言うことに従いベンジャミンは行きたくない幼稚園に入るが、先生に文句をつけられたおかげで幼稚園をやめる事が出来る。そして、12歳(外見58歳)のときには両親は息子の扱いに次第に慣れてくる。ベンジャミンが鏡をみて自分は生まれた時よりも健康状態がよくなった、と感じたので父に会いに行き、「自分は成長しているので長ズボンをはきたい」という主張に、今までは illusionary speculation (p. 20) でベンジャミンを見てきた父が、silent agreement を示し、Finally a compromise was reached. (p. 20) と妥協に達した。父が子に妥協したことにより、そのお返しに子は譲歩しようとする。ベンジャミンが生まれて父と息子が妥協点を見つけ出すのに、12年の歳月が必要であった。

これは、親子の関係は、会話による大人の相互理解だけでは構築困難であり、親が子に対する期待、子が親に対する期待を、お互いに諦めて妥協することによって、関係性を成立させたのである。

換言すると、生命時間が親子で逆に進む場合、自然発生的な親子間での愛情と信頼関係の構築は困難となり、またそれを十分に補うすべもないことを示している。自然発生的な親子関係の構築は、子供の未来に親の夢を重ねて育てることにより育まれるものであり、この未来の夢を描けない子供を育てるということは、親子での未来の創造と夢の共有が困難だからである。残された道はただひとつ、ただ相手への期待を捨てて、ありのままの相手を受容していくしかない。

Samuel Ullmann の詩 “YOUTH” に

You are as young as your faith, as old as your doubt/ as young as your self-confidence, as

old as your fear, /as young as your hope, as old as your despair. (pp. 10-11)⁶⁾

とあるが、これは親子間での愛情においても言え、未来に希望の持てないベンジャミンには絶望的なことである。未来とは時間がもたらしてくれる産物であり、希望とは時間がくれる宝物である。

この幼少期の親子関係の構築について、映画『ベンジャミン・バトン 数奇な人生』ではどのように描いているのであろうか。

この映画は、フィッツジェラルドの原作を、Eric Roth が脚本で大幅に改作したものを監督 David Fincher が映画化したものである。映画で大きく改作された点は、原作が生命時間が逆転する人生の不幸を中心に描いているのに対し、映画はそのハンディを乗り越えて前向きに生きるベンジャミンの人間としての成長と感動的な家族愛の物語になっている点である。この映画は、『おくりびと』が外国語映画賞でオスカーを獲得して話題になった2009年2月の第81回アカデミー賞において、13部門でノミネートされ、視覚効果賞 (Best Visual Effects)、メイクアップ賞 (Best Makeup)、美術監督賞 (Best Art Direction) の3部門でオスカーを獲得するという栄誉に浴している。ノミネート数だけで見るとこの年では最多となっている。またこの映画は他にも第62回英国アカデミー映画賞 (62nd British Academy Film Awards) でも3部門で受賞するなど、数々の映画関係の賞を獲得している。ベンジャミン役は時間の経過に沿って Brad Pitt など7人が演じ、また恋人役も Cate Blanchett など3人が演じるという異例のキャストとなっている。映画制作者達にとっても、フィッツジェラルドの生命時間と恋愛時間をどう処理するかは大問題だったのである。

映画では、ベンジャミンは生まれて病院から出た直後、父親に捨てられ、拾った黒人女性が老人ホームで育てるという設定になっている。その時の黒人女性には子供がなく、黒人女性の子供への愛情を受けながら育てられるという設定である。ここでは親子間の葛藤はなく、また彼を取り巻く環境が老人ホームであるので老人同士での人間関係を築くことで社会的成長を図るという設定になっている。原作に比べて導入部の不自然さは少なくなっている。

換言すると、原作の親子関係の構築段階は映画としては導入として弱いので、代わりに多彩な過去を持つ老人との出会いを人間形成のスタートという設定にしたものと思われる。

(2) 生命時間が逆に進む中での自意識の確立

ベンジャミンは成長してくると、自分の生命時間の異変を自覚し、

6) 宇野収, 作山宗久著, 『青春』という名の詩—幻の詩人 サミュエル・ウルマン』産能大学出版部 (1986)

He was as puzzled as anyone else at the apparently advanced age of his mind and body at birth. He read up on it in the medical journal, but found that no such case had been previously recorded. (p. 18)

と、知的能力で自分が世間とは違う生命時間のもとに生きていることを自覚し悩み始める。

大切なことは、全ての人間は自分の生命時間を認識しないと自分の将来設計、すなわち自分の幸福設計ができないことである。老人で生まれたベンジャミンには将来設計が立てられないのである。

青年期のベンジャミンは18歳（外見52歳）になると父に言われたとおりにエール大学の一人になる。が、そこで変人扱いされ、数々の罵言を投げつけられる。その中には、“Go to Harvard!” (p. 24) というものがあつた。父に言われたとおりに Yale 大学に進もうとしたベンジャミンであつたが、この屈辱を味わい、彼は父に言われた通りではなく、初めて自分で決心して「将来は Harvard で見返してやる」という気持ちを抱き、失意の中で故郷に帰ってくる。このときベンジャミンは心の中で、自分の生命時間が世間には受け入れられないものであることをはっきりと再確認したのだ。

青年期とは誰もが自分の未来を、他人との競争の中で見出し、自分を磨いていく時代である。自分の生命時間を友人や大人との比較ではっきりと自覚する時期である。その時期にベンジャミンは大学や社会から手酷い拒絶を受けたのである。それでもベンジャミンは挫折することなく自分の進む道を強く決意する。これは逆転しているがベンジャミンの生命時間は、生命の強いエネルギーに駆られて、未来構築に突き進んでいることを示している。生命時間における青年期とは人生の未来構想を打ち立てる時期である。ベンジャミンは自我の確立をしたのである。

その強烈な自我の基盤があつてこそ、生命時間が逆転する中での恋愛時間が成立する。

映画では自我の構築段階をどう表現したか。映画では何人かのユニークな個性を持つ友人との交流を通じて、ベンジャミンが人を知り社会を知り、社会的自立と大人への脱皮を図る過程が描かれている。特にマイク船長との出会いは、彼が経済的に自立し、人間として自立することに大きな影響を及ぼす出来事として描かれている。ラストでは、ベンジャミンの自我の構築に大きく関わったさまざまな人物達を、登場させて締めくくっている。

Ⅲ-2. 生命時間が逆転する中で、男女の恋愛がどのようにして成立しえたか

(ベンジャミン20歳（外見50歳）ヒルデガルド20歳)

(1) 年齢差を乗り越えて恋愛を成功させたもの

20歳（外見50歳）になったベンジャミンは父親の家業を手伝いながら社交界へのデビュー

を果たす。あるときシェヴリン家の別荘で開かれた舞踏会でモンクリーフ将軍の娘ヒルデガルドと出会う。

A lady got out, then an elderly gentleman, then another young lady, beautiful as sin. Benjamin started; an almost chemical change seemed to dissolve and recompose the very elements of his body. A rigor passed over him, blood rose into his cheeks, his forehead, and there was a steady thumping in his ears. It was first love. (pp. 26-27)

この時からベンジャミンの中に恋愛時間が時を刻むようになった。この恋愛時間は外見に反して前に向いて進む時間であった。

この恋愛を成立させるためにフィッツジェラルドが着想したのが、妻となる20歳のヒルデガルドを50歳代の男性好みの女に仕立てるという設定である。この設定により50代に見えるベンジャミンと若い女性との恋愛を成立させたのである。こうして互いの外見の年齢差を乗り越えて二人は意気投合して恋に落ちる。そして二人は妻ヒルデガルドの父親である将軍の猛反対にも関わらず結婚する。

生命時計が反対方向に進む男女が、燃え盛る恋の炎に任せて愛し合い結婚するのに多くの時間は必要としない。ベンジャミンは外見50歳で20歳の妻と結婚したのである。二人は結婚したときの関係が長く続くものとの錯覚をもって結ばれた。二人は結婚から10年余りは希望に近い夫婦生活を過ごし得た。少なくともその期間は二人の恋愛時間は同期して動き、大きなギャップを生むことなく進むことができたといえる。この構構が、フィッツジェラルドがこの小説に恋愛と結婚を持ち込むことを成功させた秘訣である。

しかし、恋愛時間の同期は、二人の生命時間が逆方向に廻るとき、余りにも早くその期間が終わりを迎えてしまう。

(2) 生命時間の共有が不可欠な時代

(結婚15年後ベンジャミン約35歳 (外見35歳) 妻ヒルデガルド35歳)

ベンジャミンは結婚後、経済的に大成功を収め資産を倍増するだけでなく、この街で一番早く自家用車の所有者になった。彼は人がうらやむ社会的・経済的成功を収めたばかりでなく、年々若返り、朝起きるたびに生気が全身にみなぎる感触を覚えるようになる。

このことは彼の生命時間が老人から脱出し、働き盛りの壮年期に入ってきたことを伺わせる。しかし、一方で彼は妻ヒルデガルドへの興味を失いつつあった。妻の年齢が35歳になり、彼女の蜂蜜色の髪は地味な茶色に、the blue enamel of her eyes (p. 34) は、cheap crockeryのように色あせたものになり、何よりも生活を楽しもうというバイタリティが無くなってし

まったのである。これは、ヒルデガルドは50歳は the mellow age と思い、ベンジャミンはヒルデガルドを若くて beautiful as sin と思い結婚してしまったが、二人の生命時間が逆方向に回るため、結婚して15年がたつと二人とも35歳になり、これまで二人を結び付けていた年齢的接点が消えていったからである。

若い女ヒルデガルドを求めたベンジャミンの恋愛時間と、50歳を夫の理想年齢と考えていたヒルデガルドの恋愛時間とは、同期することが困難になるが、このことは二人が愛しあう時間も共有できなくなったことを意味している。男女の愛とは、生命時間の共有があってこそ成立する。

ベンジャミンは冷たい家庭から逃れるように戦争に出て、3年後に戦争から帰るとそこには40歳になり頭に白いものが混じり始めた妻が待っていた。その姿をみるとベンジャミンの気はふさいでしまう。逆にベンジャミンは益々若返っており、外見30歳の男になっていた。彼女はベンジャミンに、若返りを止めて他の人と同じように正しい道を歩むように言う。

Hildegard regarded him with scorn. ... She sniffed again. "The idea," she said, and after a moment: "I should think you'd have enough pride to stop it." (p. 37)

ベンジャミンはその要求には応えられない。ベンジャミン自身でさえ、人と反対にどんどん若返ることに不安になっているのであるから、当然二人の間の亀裂が更に広がってしまう。いつしか妻は50歳、ベンジャミンは外見20歳になり、二人は共に外出することさえなくなる。ベンジャミンの世界はどんどん広がり、逆にヒルデガルドの世界はどんどん狭まっていく。そしてついに別居することになる。

自分が若返るのをずっと不安に思っていたベンジャミンは外見20歳近くになると、今度は不安ではなく、自分の若い姿を喜ぶようになる。自分の力ではどうしようもない肉体的な若返りを、心でようやく受け入れられるようになった。ところが、自分の若返りを心で受け入れられるようになると、別の問題が生じてくる。There was only one fly in the delicious ointment. (p. 39) とあるように、若くて罪深いほど美しかった妻を「はえ」と表現し、妻を見るとたまらなく嫌な気持ちになっていく。

男女の愛の成立と継続には、お互いの恋愛時間を共有できることが必須である。片方の生命時間が逆転している時、二人が共有できる恋愛時間は限られ、そして中断され愛は破綻する。すなわち恋愛時間よりも生命時間が支配力を持つのである。

若い妻の魅力に燃えたベンジャミンの恋愛感情は「はえ」のような存在になった妻に対して消えうせてしまい、恋愛時間が自ら作動を停止してしまう。

フィッツジェラルドは小説構成の中で、男女の年齢差を乗り越えて恋愛は成就することを可

能ならしめたが、生命時間が逆転する中では、長期間に亘る愛情生活までは維持することは困難であると考えたのだ。

映画では、夫婦愛の点については大きく構成を変えている。映画はこの物語を、数奇な運命に弄ばれるベンジャミンの愛と感動のドラマに仕立てている。これは映画として観客を惹きつける要素を家族の愛情物語に求めたからである。映画では、自分がどんどん若返り、いずれは子供になっていくことを予知して、*You're going to have to find a real father for her.* (p. 246)⁷⁾ と Daisy に語り、ベンジャミンは家族の不幸を救うためには自分が去ることだと考え、娘が物心つく前に妻と娘に全財産を譲って去っていくというストーリーになっている。愛の欲望が食い違うことにより夫婦生活が破綻して別居に至る原作に比べ、映画ではベンジャミンが家族を守るために自己犠牲の道を選ぶという脚本になっており、これが感動を呼ぶ一因にもなっている。

Ⅲ-3. 胎内回帰での人生終焉——自己認識と結末

(ベンジャミン50～70歳 (外見20～0歳))

今度はベンジャミンは自分の意志で Harvard に入学する。ベンジャミンは、父の意志で以前行かされたエール大学で“Go to Harvard!”とやじられたこともあり、入学当初はフットボールの試合で大活躍して人気者になるのだが、3年生になった頃には彼の体重が減り、フットボール選手として活躍できなくなる。不安を乗り越えてようやく自分の若返りを喜ぶようになれたベンジャミンであったが、皮肉にも、現実にはもうそれを喜べなくなってしまう。そしていつしか、あれほど華麗に活躍していた社交界にも行けなくなり、今度は大学でなく予備校に行こうと考えたが、息子に拒否される羽目になる。息子にとっても既に父親はやっかいな存在になっていた。33歳の息子からすると、外見16歳の父親は受け入れがたい事実であり、事実とは考えられないゆえに、

“As a matter of fact,” he added, “you’d better not go on with this business much longer. You better pull up short. ... you better turn right around and start back the other way. This has gone too far to be a joke. It isn’t funny any longer. You——you behave yourself!” (p. 42)

と言い放つ。息子から *You behave yourself!* とまで言われ、ベンジャミンは *on the verge of tears* (p. 43) になってしまう。この辺りから、幼年期へ向かうベンジャミンは、自分がどう

7) Eric Roth, *The Curious Case of Benjamin Button Story to Screenplay* (Scribner, 2008)

しようもなくなると自然に幼児によくみられる tears も増えてくる。そして、若返ったベンジャミンはもはや妻からも息子からも拒否され疎まれる存在でしかなくなっていた。

ベンジャミンは、ロスコーの息子（ベンジャミンの孫）と幼稚園に入る。一度目に、父に言われた事に従って幼稚園に入った時とは違い、Benjamin found that play with little strips of colored paper, making mats and chairs and curious and beautiful designs, was the most fascinating game in the world. (p. 49) と、自分の世界を楽しんでいる。無理して入園させられた時とは違い、本当に自分に適した所でくつろぎを感じている。

さらに、孫が小学校に入り、ベンジャミンが幼稚園に残った時、幼稚園児が “what they would do when they grew up a shadow would cross his little face as if in a dim, childish way he realized that those were things in which he was never to share.” (p. 49) と語ったのを聞いたベンジャミンは、自分は人とは違う運命を背負っていることを “realize” している。ベンジャミンは幼稚園で、ほかの園児たちが大きくなったときの夢を語り合うのを見て、自分に未来がないことを自覚する。これはベンジャミンが自分自身の生きてきた人生を自覚していることを示している。自分の生命時間は他の園児とは違い、すでに終盤に向かっていることを悟っているからである。

ここで初めて生命時間と、ベンジャミンの運命との一致を見せている。自分の未来が、自分の生命時間が終焉に向かって最後の時を刻んでいることをベンジャミンは悟ったのだ。この時点でベンジャミンは普通の人とは逆に回る生命時間のエンディングを受け入れていたのである。

乳児になり、あれほど広がったベンジャミンの世界はどんどん狭くなっていく。70歳の外見で生まれたときにベンジャミンが父親に、“And cane, father, I want to have a cane.” (p. 10) と杖をリクエストした。その70年後、幼児になり、単語レベルの会話しかできなくなった時、“Fight, fight, fight.” (p. 50) と戦争中の思い出が重なり、a big cane (p. 50) で、あちこち叩いて遊ぶ。時間の経過と共に益々ベンジャミンの世界は狭くなり、夢も見なくなり、過去もなくなる。「過去」—— 戦争、妻、家業、祖父等々は全て “like unsubstantial dreams from his mind as though they had never been.” (p. 51) となって消え去ってしまう。赤ん坊本来の「お腹がすけば泣く」が全てになる。人間の五感の中の、「聞くこと」「匂うこと」「見ること」もほとんどできなくなり、light and darkness (p. 52) の世界から、最後には、it was all dark. (p. 52) となり、全ては faded out altogether from his mind. と、暗闇の世界へ入り込んでついには母親の胎内世界に戻る。

村尾純子氏は前述した論文の中で、この小説のテーマについて次のように述べている。

生から死への時間の流れをさかのぼること、あるいは時間の支配から逃れ、死の苦しみ

のない状態になることではないかという推測が成り立つのである。(p. 66)⁸⁾

そしてそれらは母親の胎内への回帰願望であり、この小説の底流となっているのは作者の楽園願望であると述べている。

一方、映画ではどう扱っているか。妻デイジーはベンジャミンと別れた後に再婚した相手とも死別し、一人で暮らしている。ある日警察から、衰弱して記憶を失った子供を保護したところ、持ち物からバトン家由来の者ではないかとの連絡が入り、その子供がベンジャミンだと判った。そしてベンジャミンは、かつて育てられた老人ホームに引き取られることになる。最初は毎日心配でベンジャミンを見に行っていたデイジーも、ベンジャミンの記憶障害が進み、ついには老人ホームに移り住む。そしていつしか赤ん坊になったベンジャミンは老妻の腕に抱かれて眠るように最後を迎えるという設定である。

そして映画では、Mr. Gateau の時計は、駅から取りはずされても時を刻み続けているところで終わっている。

A storage room. Old track signs. Old waiting room chairs. The discarded, and forgotten. And laying on its side under an old tarpaulin—is “Mr. Cake’s” clock... the angel still pushing the hands... running backwards... as water rushes in and begins flooding the room... (p. 295)

時間がどちらに回ろうとも違いはなく確実に時は歩み続け、意味があるのはただ自分の人生を変えてくれる人との出会いであり、その中で自分の最善を尽くして生きることなのだと締めくくっている。

III-4. この小説で作者が表現しようとした目的

昔から多くの人達は、不老長寿や若返りを求めてきた。古代から現代に至るまで、不老長寿、アンティ・エイジング、あるいは若返りを促す食べ物や秘薬は絶えず世間で騒がれている。なぜなら人々がそれを希求するからである。そしてそれは文学の世界でも数多く取り上げられてきた。

文学の世界における時間に対しての研究は、それを美術的・芸術的に捉える視点と哲学的・心理学的に捉える視点の二つに大別され、また両者併合して分析する視点も多く見られる。その中で Marcel Proust の *À la recherche du temps perdu* (1913–1927) では、「現実」は記憶の

8) 村尾順子著、『“The Curious Case of Benjamin Button”における楽園願望』POIESIS 27 2007

中に作られる」として不可逆な時間に流されて消滅していく人生という時間を、人間の記憶を呼び覚ます手法により取り戻そうとする試みがなされている。この試みは、人間の上を流れて消え去る時間に永続性を奪回しようとするものであり、見る人、読む人の多くに感銘を与えただけでなく、人間が不朽の芸術作品を産みだす精神活動の源泉であると指摘している。換言すれば、人類の誇る多くの絵画や彫刻は、作者の精神世界の存在に永続性を付与したいという強烈的な欲求によって成し得ることが出来たものと言える。

反面、人間の不老長寿願望の負の面を描いた小説として、Oscar Wilde の *The Picture of Dorian Gray* (1890年) があげられる。ここでは美貌の青年が肖像画に描かれた自分の美貌を永遠に手に入れようと、悪魔と契約して肖像画の中の自分と生身の自分とが老いることに関して入れ代わるというストーリーが描かれている。この小説では主人公はいつまで年を取らず、代わりに肖像画が年を取るという設定である。しかしながら、いつまでも若い主人公は肖像画の中の自分がどんどん老けて醜くなっていくのを見るに耐えられなくなり、最後には肖像画の中の自分を刺し殺すのである。しかし肖像画の中の自分こそ自分の身代わりなので、その肖像画を刺すことは自分を刺すことになり自滅してしまうのである。

この物語は人間の不老不死への欲求がいかに不条理なものであるかを示唆している。

では、奇想天外な発想である生命時間が逆転する物語によって、作家フィッツジェラルドは何を表現したかったのか、その目的はどこにあるのか。

フィッツジェラルドは *The Curious Case of Benjamin Button* で止めどなく若返る人生は、人生の究極的な価値といわれる家族や男女間の愛の構築に不可欠な要素の欠落を招き、愛と信頼無き人生になることを極端な例で示したのではないだろうか。人々が本当に不老不死や若返ることができたならば、そこにはどんな人生が待っているのか、それを小説で逆説的に示したのではなかろうか。

また、映画では人生と時間の関係を盲人の時計職人を登場させて象徴的に示している。映画では戦争で死んだ息子の再来を願う時計職人が、時を逆に刻む時計をニューオーリンズの駅に取り付け、ルーズベルト大統領参列の中で、生きている大切さを語る。

I made it that way ... so that perhaps the boys that we lost in the war might stand and come home again... home to farm, to work, have children, to live long, full lives... (p. 12)

人間は失われた過去を取戻すために、時間が逆戻りして欲しいと何度も願うものである。この願いを込めた逆周りする時間を生きることを、映画で表現しようとしている。

原作と映画を対比して考察すると、原作は生命時間が逆転するゆえの愛の不毛と生きることの孤独を表現しているのに対し、映画では逆に深く愛し合うがゆえに別離を選ばざるを得

ないベンジャミンの究極の孤独を表現するに成功している。

そしていずれにも共通していることは、人生を価値あるものにする唯一のものが、限られた時間内での人との出会いと愛の貴重さであるということである。

おわりに

フィッツジェラルドの小説に書かれた人生と時間に関する思想を考察すると、人生は生命時間を土台とし、その上に個々人の恋愛時間の持つ強力なエネルギーによって築かれるものと考えられる。幸せな人生を構築するには、まず自分を取り巻く大切な人達との生命時間において共通の夢を持ち、その夢を育む十分な時間を共有すること、加えて男女の恋愛時間の微妙な同期性が一致することが重要であると言える。

特に生命時間の逆転している小説ベンジャミン・バトンでは、人間は、限りある時間を生命時間として与えられたものであり、この二度と還らない今という時間を、天与の宝物として受け止め、生きることの価値と喜びを味わうことが人生の使命であると示唆している。

人生とは見えない未来の可能性を夢見て、限りある時を刻むことであり、この時間を、愛する人や友人と共有できることに最大の価値があると示唆しているのである。

加えて、人生に喜びを与えてくれる恋愛の成否は、男女の恋愛時間が上手く同期して時を刻むことができるか否かにかかっており、その同期性を獲得するには、二人の心の中にある恋愛時間の刻む音色に耳を澄ませて聞かなくてはいけない。どちらかの時間の音色が停まっていたり、速すぎる場合、もう一人は相手の音色に合わせて時刻を調整することができなくてはならない。

フィッツジェラルドは、日々消え失せていく時間の中で、愛するものと時間を共有している人達に、そのありふれた時間をありのままに生きることに、人生の真の幸福と意義が隠されていることを語りかけているのではないか。

換言すると、時間がどう進むかではなく、時間をどう生きるかを問いかけているのではないだろうか。

Bibliography

- Greer, Andrew Sean, *The Confessions of Max Tivoli* (Picador, 2004).
Higdon, David Lean, *Time and English Fiction* (The Macmillan Press, 1977).
Kureishi, Hanif, *The Body* (Faber and Faber, 2002).
Maloney, W. J., "Hutchinson—Gilford Progeria Syndrome: Its Presentation in F. Scott Fitzgerald's Short Story 'The Curious Case of Benjamin Button' and Its Oral Manifestations" *Journal of Dental Research* (2009).
Tobin, Patricia Drechsel, *Time and the Novel* (Princeton University Press, 1978).

- Wilde, Oscar, *The Picture of Dorian Gray* (Penguin Books, 1891).
岩元巖編集, 『小説の時間 Foreign Literature 3』 朝日出版社 1975
岡本正明著, 『20世紀文学と時間——ブルーストからガルシア—マルケスまで』 近代文芸社 2007
岡本靖正著, 『文学形式の諸相—文学の時間形式・小説の叙法・ヒューマー』 英語文学世界叢書 1975
小林靖男著, 『出来事としての文学—時間錯誤の構造』 講談社学術文庫 2007
佐藤泰正著, 『文学における時間』 笠間選書 1979
山田晶訳, アウグスチヌス, 『告白』 中央公論社 1968

SUMMARY

Time and Life in the Novel and Short Stories of F. Scott Fitzgerald

Yuko Yamanaka

The aim of this paper is to study F. Scott Fitzgerald's *The Curious Case of Benjamin Button*, *Winter Dreams* and *The Great Gatsby* by closely analyzing the significance of time and life. Fitzgerald described the importance of time and life, and emphasized this point, especially in *The Curious Case of Benjamin Button*.

In this paper, in order to better understand the concept of the evolution of time in Fitzgerald's works, time is divided into "time of life" and "time of love" for each person's time span. He depicts how the significance of one's life is influenced by the changes of events and how they affect one's life in the very limited time available.

"Time of love" and "time of life" progress together in *Winter Dreams*, while "time of life" ends on a certain day in *The Great Gatsby* and "time of life" progresses in reverse in *The Curious Case of Benjamin Button*.

When "time of life" and "time of love" work unexpectedly and contrary to our ordinary concept of time, we wonder how we can recognize consequent changes of life in such strange streams of time and whether we can find happiness in our life or not.

This paper also notes and places attention to the movie *The Curious Case of Benjamin Button*. It introduces Mr. Gateau's clock, which is travelling backwards in time and gives people the true significance of life. It is noticeable that the movie makes Benjamin's life more profound by adding new various characters who affect and broaden his way of life.